



Title	「ての」に関する先行研究と問題点の整理
Author(s)	段, 建秀
Citation	研究論集, 24, 183 (左) -192 (左)
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.l183
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94035
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_rjgshhs_24_p183-192_l.pdf



「ての」に関する先行研究と問題点の整理

段 建 秀

要 旨

本稿は、現代日本語における「ての」構造（動詞の連用形＋テ＋ノ＋名詞）の形式についての先行研究を体系的に整理し、「ての」がどのように考察されてきたかを明らかにするとともに、既存の研究において浮かび上がった問題点を提起して論述する。「ての」の位置付けや今後の研究の方向性について論述した結果、以下の3点が明らかになった。(a)「ての」形式の考察において、「て」の意味用法から分析することの妥当性についてはさらなる検討が必要であることを主張した。(b)「て」による連体修飾を含む構文と連用修飾を含む構文の間には、単純な相互派生関係が認められず、意味的に異なる点が存在することを示した。(c)「ての」形式には「初めての見学」や「信頼あつての取引」のような周辺の形式が存在することが確認され、「ての」形式と「複合格助詞＋の」形式は明確な基準を設けなければ全く異なる種類として混同して分析されることはできないことが明らかになった。

1. はじめに

本稿は（1）および（2）に見られる「ての」形式に焦点を当て、このような形式に関する先行研究をまとめるものである。従来、この形式については「考えて」や「歩いて」といった形態を一つの単語とみなす立場が主流であった。例えば、渡辺（1974）はこれを「並列形」と位置付け、姫野（1983）は「動詞「て」形」として分類し、加藤（2003）は動詞の「連用テ形」という名称で活用形の一つとして認定している。また、用言の連用形あるいは音便形に接続助詞「て」が結合したものと解釈する立場も散見される。

- （1） この問題についてじっくり考えての結論です。
- （2） 太郎は歩いての通勤を好んでいる。

本稿は、上述の立場のうち後者の見解に基づき、「動詞の連用形+接続助詞テ」の形式としてこの「ての」形式を扱う。さらに、「考えての結果」や「歩いての通勤」のように、この形式に助詞「の」が接続し、「動詞の連用形+接続助詞テ+ノ+名詞」という形態を形成し、これが連体修飾の役割を果たすことができることを明らかにする。本稿では、この形式を「ての」形式と呼称することとする。本稿の目的は、「ての」形式に関する先行研究を整理し、その中で存在の問題点を抽出し、「ての」形式の研究の位置付けを明らかにし、今後の研究の方向を展望することである。

このような「ての」を用いた表現については、1980年代から多くの先行研究が行われてきた。まず、第2節では具体的な先行研究を取り上げ、それらの有用な記述を再検討し、「ての」がこれまでどのように研究されたかを概観する。第3節では、先行研究で説明が不十分であることを指摘し、その部分を取り上げ、これらの点に対してどのような記述がより効果的であるかを論じる。第4節では、今後の「ての」形式の位置付けを検討し、新たな分類方法を試みる。最後に、第5節では本稿における主張を総括し、今後の研究の方法性について展望を示す。

2. 「ての」に関する先行研究

「ての」の形式は、連体修飾を行う要素として最初に提起されたものである。寺村(1981, 1991)は連体を「連体修飾」と「連体補充」に区別し、日本語における連体修飾の働きをする形式には、品詞で分類すると、「名詞(+格助詞)+の」、「形容詞・形容動詞(+形容詞)」、「連体詞」、「副詞+の」、「連体節」、「その他」のようなものと述べている。「その他」について寺村(1991: 237)は、「知ってのこと、飲みながらの、～すればの」などの例を挙げている。この中で「知ってのこと」のような形式は、「ての」形式による連体修飾として様々研究されてきた。寺村の前に、この形式の連体修飾の機能について触れている研究者もいる。湯沢(1956)は「本人に逢っての話」のような形式を「動詞に助詞の付いた連語+の」と記述されている。

本節では、「ての」形式についての先行研究の概要を述べる。まずは「ての」形式がどのような視点から考察されてきたかを概観する。ここでは主に姫野(1983)、井口(1992)、茂木・森(2006)、丹羽(2006, 2011)、杉本(2010)などの先行研究を取り上げる。

2.1 姫野(1983)

姫野(1983)は国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞』を参考し、「て」形の機能を次のように分類している。①推移・連続、②原因・理由、③方法・手段、④並列・対比など、⑤逆説条件、⑥事態・状況・関係事物の提示。この中で「ての」形式が適用されるのは①、②、③、及び状況の用法であることを指摘している。姫野はそれぞれの用法に該当する例文を次のように挙げている。

- (3) 一年間休んでの予定通りの復活で…… (朝日 83 年 1 月)
- (4) 判決は予断を許さないが、田中有罪を想定しての波紋は、あまりに複雑で、各派とも見極めをつけられない状況。(朝日 81 年 10 月)
- (5) 仕事を離れての個人的関係をもつことは許されていない。(読売 81 年 12 月)

姫野 (1983 : 30-36)

姫野は「ての」形式はほとんどが連体形「～した+名詞」に言い換え可能であるが、連体修飾節とその名詞の間には多義的な意味対応が存在し、組み合わせによっては意味が曖昧になることがあると述べている。また、「て」の意味機能①, ②, ③によって「動詞「て」形」と「連体形への言い換え」に分類し、「動詞「て」形」をさらに「用言の修飾」と「体言の修飾」に分けている。さらに、「～してこそ～する」という文が省略されて「～しての」の形式になる場合、被修飾名詞は、必ずしも動詞の名詞化したものとは限らず、「あなたあつての私」のような形も可能であることを指摘している。

2.2 井口 (1992)

井口 (1992) は「『サラ金に追われての夜逃げ』型の連体構造」というタイトルで論を展開した。この論文では、「V テノ連体句にはどのような特徴があるか」、「V テノ連体句と連体節との違いとは何か。置き換えは可能か。また、それはどのような場合、どのような条件の下でか」という二つの問題点を中心に議論している。井口は議論に入る前に寺村 (1991) の「連体修飾」と「連用補充」の概念を確認し、V テノ連体句も二種類を区別しなければならないと指摘し、被修飾名詞の種類によって必ずしも修飾・補充をつけることはできないことを明らかにした。

- (6) 約半世紀かけての教会建築
- (7) 過激派のテロ攻撃を警戒しての措置

井口 (1992 : 103)

一つ目の問題点の考察結果として、V テノ連体句は連体節と同様に補充と修飾の両方の関係があることが予想されるが、多くの場合が補充句であることが明らかにされた。二つ目の問題点の考察の結論として、連体節と V テノ連体句を直接関連づけるのは困難であるが、置き換えには一定のパターンが存在し、それに該当するものだけが置き換えが可能であることと主張している。置き換えのパターンについては、(8) (9) のように名詞との意味関係が連体補充と連体修飾の両方を含む場合であることを述べている。

- (8) ミサイルを使つての攻撃 (使つて攻撃「する」)

(9) 各党入り乱れての戦い (←戦う)

井口 (1992 : 107)

(8) のように被修飾名詞が漢語名詞である場合, 「V テノ N」 $\leftrightarrow$ 「V テ, N (ヲ) スル」の変換は可能である。(9) のように被修飾名詞が漢語名詞ではなく動詞派生の名詞の場合, 連体節への置き換えは可能である。井口 (1992) はさらに「スポーツあつての選手」のように意味的・一般常識的に類推して補うものを提起し, V テノ連体句の意味解釈の方法を示した。

2.3 茂木・森 (2006)

茂木・森 (2006) は「階段に座つての食事」や「全力を尽くしての結果」のように, テ節を内部に含む名詞句を「テノ名詞句」と呼び, 形態的な基準に基づいて被修飾名詞を「述語性名詞」と「非述語性名詞」¹ に分類し, それぞれの名詞とテ節との関係が異なることを指摘した。

(10) 重要書類を持つての移動 (付帯状況)

(11) 重要書類を確認しての契約 (継起)

(12) 重要書類を忘れての遅刻 (原因・理由)

茂木・森 (2006 : 145)

「述語性名詞」を主要部とする「テノ名詞句」の用法として, 以上の例のように「付帯状況」, 「継起」, 「原因・理由」が挙げられる。「非述語名詞」に関しては, 「述語名詞」に比べてテノ名詞句の生産性が低い点が指摘され, 寺村の連体修飾の「外の関係」と関連付けられ, その中の「相対性」タイプの名詞には他の名詞とは異なる制限が見られることと指摘している。さらに, 茂木・森 (2006) は二つのタイプのテノ名詞句で観察される制限から, テノ名詞句全体に共通する意味的特徴を抽出している。具体的には, テ節の意味という視点から, テノ名詞句全体の特徴付けについて「テ節の事態と被修飾名詞の事態とは, 継起的もしくは並行的関係にあり, この関係が逆行すること」と批判し, 「テノ名詞句には, テ節の持つ時間的な展開が内包されている」と主張した。

¹ 茂木・森 (2006) は, 「述語性名詞」とは, 述語文と並行する性質を持つ名詞であり, 典型的には動きを含んだ出来事的な意味内容を持つ名詞群であると述べている。これらの名詞は, 「する」を後接に伴うことができる。具体的な例としては, 「家族を置いての転勤」; 「批判を受けての取り消し」が挙げられる。一方, 「非述語性名詞」は, 「する」を後接に伴わず, 動詞の派生形でもない名詞を指す。例としては, 「深く考えての言葉」や「失敗を踏まえての方針」が挙げられる。このように, 茂木・森 (2006) は「述語性名詞」と「非述語性名詞」の二つのカテゴリーにおいて, それぞれ異なる性質を示すことを明確にしている。

2.4 丹羽 (2006)

丹羽 (2006) は、「ての」形式を「て」形の連体化としてだけでは不十分とし、「ての」形式自体の用法に対する考察が必要であることを指摘している。また、「ての」節による連体修飾の主名詞を「動作性の主名詞」と「非動作性の主名詞」とに分類している。

(13) 一年間休んでの予定通りの復活で……

(14) ひたすら働き続けての定年。(ひたすら働き続けて迎える定年)

丹羽 (2006 : 221-222)

例 (13) は「動作性の主名詞」の例であり、「一年間休んで予定通り復活する」というように、「A ての B」が「A て B する」に対応する関係にある。例 (14) は「非動作性の主名詞」の例であり、括弧内のような意味で理解することは可能であるが、丹羽は「ての」形式はあまり自然ではないと指摘している。

(15) 務めていた千葉市若葉区役所を退職しての挑戦だ。(毎日 1.4 夕)

(16) その参内をおわっての午後、義昭は本圀寺の館に信長をまねき、信長のために祝賀の宴を張った。

丹羽 (2006 : 231)

さらに、「A ての B」を「B に内在的・付随的關係にある A によって B を修飾するタイプ」と「相対補充を表すタイプ」(「非動作性の主名詞」のうちの相対名詞) に大別している。(15) は継起的な例文であり、「背景状況」を表すものとして示されている。連体形を表す相対修飾の関係には、時間制、空間性、原因結果の關係が含まれるが、(16) のように、主に時間制に関するものであることを明らかにした。前者は、A が B に内在する「背景状況」、「原因理由」、「方法」「逆説」を表すものと、A が B に付随する「様態」を表すものに分けられる。後者は、A の動作が B の動作から独立しており、もっぱら「時間性」を示し、修飾部の表す時間と主名詞が表す時間が前—後という關係にあることを主張している。

2.5 杉本 (2010)

杉本 (2010) は、「ての」形式自体の考察よりも、構成要素として動詞を含む複合格助詞の連体形式について、コーパスを用いて研究を行なった。その研究では、以下の例のように、テノ形式と連体形の使用の偏りを示し、その理由を考察した。

(17) 複合格助詞に関しての論文

(18) 複合格助詞に関する論文

杉本 (2010 : 90)

杉本は、代表的な複合格助詞の一つである「によって」を中心に展開し、「に関して」「に対して」「に際して」の連体形式における偏りを示した。研究の結果、新聞記事である毎日新聞に比べ、ウェブの知恵袋の方が「によっての」という形式の用例が多いことが明らかになった。「による」が硬い文体で用いられ、「によっての」は一般的な文体でも使われるが、その用例は極めて少ないため、文体だけでは説明が困難であると指摘している。

また、「について」以外の複合格助詞に関しては、動作主を示す「によって」がテノ形式では現れず、別個の事態を示すものに限ってテノ形式で現れることがあることを指摘している。例えば、「に関して」「に対して」のような別個の事態を示さない複合格助詞はテノ形式で現れにくい一方、「に際して」のように別個の事態を示す複合格助詞はテノ形で現れやすい。この偏りには、それぞれの複合格助詞の複合度の違いや連体形式による文体の違いが関係しているが、これらだけでは偏りを十分に説明することができないと結論づけた。

3. 「ての」問題点の検討

第2節では、「ての」形式に関する先行研究を概観し、それぞれの研究内容を整理した。本節では、これらの先行研究を踏まえ、指摘されるべき問題点について詳細に論じる。

3.1 「て」の意味機能を基にする妥当性

まずは、「ての」の分析が「て」の意味機能から出発することの妥当性について検討する。接続助詞「て」の用法は、様々な研究において多岐にわたって分析されている。姫野 (1983) や丹羽 (2006) は、「ての」形式の分析を「て」の意味特徴から始め、それを再分類することで研究を進めている。姫野は国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞』が提示する五つの用法に基づき、「ての」の意味機能を分析する流れをとっている。しかしながら、「て」が様々な意味を持つことは日本語教育において重要であるとはいえ、「て」の本質的な分類に焦点を当てていないと考えられる。接続助詞「て」は、二つの文を接続し、前件と後件の命題内容が結びつける役割をもつ。意味機能が多岐にわたるが、根本的には先行事態と後行事態を繋ぐものと考えることができる。例えば、(3)～(5)の「て」はそれぞれ推移、原因・理由、状況を表しているが、本質的には、「一年間休んで」「有罪を想定して」「仕事を離れて」という先行事態が存在することにより、「復活」「波紋」「個人的関係をもつこと」という後行事態の状況が規定されている。この点については以下の例を考察する。

- (19) 太郎は自転車で転んで怪我をした。
(20) 太郎は自転車で転んで怪我をしなかった。

(19) の例では、太郎が自転車で転ぶという先行事態が発生し、その結果として太郎が怪我をしたことが表現されている。この「て」は、先行事態が原因であることを示す機能を持っている。一方、(20) の例では、太郎が自転車で転んだにもかかわらず、怪我をしなかったことが述べられている。また、(20) の例はもう一つの意味解釈が可能である。つまり、太郎は実際に怪我がしたが、その原因は自転車で転ぶことではなく、走ることで転んで怪我をしたという意味を含む場合である。ここでは、先行事態は同じであるが、結果が異なるため、「て」は逆接の意味を含む。このように、先行事態が条件となり、後接事態の結果によって「原因」「手段」「逆接・順接」といったさまざまな関係を形成することが可能である。本稿では、接続助詞「て」の意味機能は、本質的には先行事態―後行事態の関係に立脚していると考える。したがって、「ての」形式の分析が「て」の多様な意味機能から出発することの妥当性については、さらなる再考の余地があると結論づけた。

3.2 置き換えても派生関係といえるか

次に、「ての」形式の名詞句を連体修飾の機能として分析する場合と、「～て～する」という構文への置き換えに関する条件について確認する。井口（1992）は、これら二つの構文間において、どのような条件で置き換えが可能であるかを検討した。井口の研究では、二つの文の意味がそのまま保持されることを前提としており、「ての」名詞句の意味解釈は、後に接続される漢語名詞の派生でありと指摘している。しかし筆者は、これらの二つの文の間には意味の違いが存在し、派生関係にはないと主張する。姫野（1983）は、この二つの文の意味について触れており、同義であると主張している。一方、茂木・森（2006）や丹羽（2006）は、「ての」形式の」意味解釈に関して具体的な考察においては触れていない。これらの研究は、「ての」形式が修飾する名詞の性質に重点をおいており、修飾された結果としての文全体の意味に関する検討は不十分であると言える。以下に、井口（1992）の例を基に修正した例を示す。

- (21) ミサイルを使っての攻撃をする。
(22) ミサイルを使って攻撃する。

(21) は「ての」形式を用いたものであり、構文上「攻撃」という行為に焦点が当たっていると解釈できる。一方で、「ミサイルを使っての攻撃」という表現は、「ミサイルを使わない攻撃」を含意することが可能である。具体的には、「サイバーを使う攻撃」、「生物使う攻撃」や「核爆弾を使う攻撃」など、様々な攻撃手段が存在する中で、「ミサイルを使う」攻撃を選択すること

を示唆している。これに対し、(22)では、「ミサイルを使って」という部分が文の焦点であり、他の攻撃手段の選択肢を含意する解釈は(21)に比べて弱いと言える。このことから、二つの文の間に完全な同義性は認められない。

したがって、本稿では、「ての」形式と「～て～する」構文の間には厳密な同義性が存在しないことを主張する。これらはそれぞれ独自の意味的役割をもち、相互に派生関係にあるものではないと考えるべきである。今後はさらなる事例を収集し、この仮説の検証を進める必要がある。

3.3 「ての」形式と周辺的形式の検討

第2節で提起した「ての」形式に関する先行研究には、(23)のように動詞連用形の後に「ての」がつけられる例、(24)のように「について」「に関して」などの複合格助詞に「の」が後接する形式が含まれている。これらの構造を別々に研究している文献があるが、同じカテゴリーとして扱っている文献も存在する。

(23) ミサイルを使っての攻撃をする。(再掲(21))

(24) この文法現象についての研究を行う。

「について」「によって」「に対して」「をめぐって」などの複合格助詞は、全体で一つの語として認識される。このため、「についての」、「によっての」、「に対しての」や「をめぐっての」のように「の」を後接させても、「て」を単独の助詞として摘出して認識することはできない。従って、「複合格助詞+の」は「ての」形式と形態的には類似しているものの、実際には異なる種類である。

(25) 太郎ははじめての見学を計画するために、事前に資料を調べた。

(26) 彼の思い切っての決断が、会社を救った。

(25)と(26)の「はじめて」「思い切って」のような例は、動詞の連用形であるが、そのまま副詞や名詞²として固定化されている。このような形に「の」が後接されると、慣用化されたものとして認識される。「動詞連用形+て+の」という「ての」形式から拡張されたものとみなすことが可能である。このように「ての」形式から拡張された例として以下も挙げられる。

² 「はじめて」「思い切って」などのような語は名詞か副詞かという品詞的な判断の課題について、ここでは延ばしている。

(27) 経験あつての判断

(28) 信頼あつての取引

(27) と (28) は「判断」「取引」という行為が成立するのは、「経験」や「信頼」が前提になっていることを強調している。「経験」や「信頼」がなければ、適切な判断や取引が成り立たないという意味である。「～あつての」は、「～があるからこそ存在する」を指し、「ての」形式から拡張されたものとも見なすこともできる。

以上の考察から、3.3 節では、「ての」形式（「動詞連用形＋て＋の」形式）と「複合格助詞＋の」形式は別々の種類であるが、二種類の拡張された形式が「ての」形式の周縁的形式として認識できることが明らかになった。

4. おわりに

本稿では、現代日本語における「ての」構造（動詞の連用形＋て＋ノ＋名詞）の形式についての先行研究を体系的に整理し、その中での問題点を摘出して論述した。以下に本稿の整理を示す。

- (29) 「ての」形式の考察において、「て」の意味用法から分析することの妥当性についてさらなる検討の余地があることを主張した。
- (30) 「て」による連体修飾を含む構文と連用修飾を含む構文の間には相互派生関係が存在せず、意味的には異なる点があることを示した。これに立証するために、今後は多くの用例を収集し分析する必要があることを今後の課題とする。
- (31) 「ての」形式には「初めての見学」や「信頼あつての取引」のような周縁的形式が存在することが確認された。「動詞連用形＋て＋の」形式と「複合格助詞＋の」形式は予め基準を決めないと、全く異なる種類として混同して分析することはできない。

その他、接続助詞「て」を用いた「動詞連用形＋て＋の＋名詞」という構造の他の接続助詞への変換可否についても考察する必要がある。これらの点を含め、今後の課題として更なる拡張的研究を進める。

(だん けんしゅう・言語科学研究室)

参考文献

井口厚夫 (1992) 「サラ金に追われての夜逃げ」型の連体構造」『ソフトウェア文書のための日本語処理

- の研究 11 —計算機用レキシコンのために(3)— pp.109-111 情報処理振興事業協会技術センター
加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』
杉本 武(2010)「複合格助詞の連体用法について」『コーパス日本語学の新展開』 pp.90-106, 田野村忠
温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦; 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」日本
語学班
寺村秀夫(1981)『日本語の文法』(下) 国立国語研究所
寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味3』 くろしお出版
丹羽哲也(2006)「ての」の用法について『複合辞研究の現在』研究叢書 357, pp.221-234, 藤田保幸,
山崎誠編, 和泉書院
姫野昌子(1983)「動詞「て」形の連体修飾構造」日本語学校論集 10 (10), pp.25-43
茂木俊伸・森篤嗣(2006)「テノ名詞句の意味と形式」世界の日本語教育, 日本語教育論集 16, pp.139-153,
国際交流基金日本語事業部企画調整課
湯沢幸吉郎(1956)『国語法精説』明治書院, pp.255-256
渡辺 実(1974)『国語構文論』塙書房